先人顕彰コーナー「図書館の直江兼続展」　2024.6/28～8/21

1　大河ドラマ「天地人」の盛況

平成 21 年（2009）の「天地人」の放送と、賑わった米沢

平成 21 年の 48 回目の NHK 大河ドラマは直江兼続が主人公の「天地人」でした。原作は火坂雅志（ひさかまさし）の同名小説で、脚本は小松江里子。直江兼続を妻夫木聡（つまぶきさとし）、上杉景勝を北村一輝（きたむらかずき）、妻のお船（せん）を常盤貴子（ときわたかこ）が演じましたが、少年時代の兼続（与六）を演じた加藤清史郎（せいしろう）の演技も脚光をあびました。「こんなところ来とうはなかった」は新語・流行語大賞にノミネートされ、平均視聴率は 21.2%という高い視聴率を記録しました。

この放映により、米沢市や六日町（現南魚沼市）等の関係地には観光客が殺到しました。米沢市上杉博物館で開催した「米沢　愛と義のまち　天地人博２００９」は、目標は 20 万人でしたが、8 月には 30 万人を達成、12 月には 50 万人達成と、連日賑わいました。直江兼続夫妻の墓がある林泉寺では、多くの観光客に対して檀家等の協力を得て入場料を徴収し、本堂や墓の案内を行うなど観光地化しました。市内は車が溢れ駐車場の確保に苦労しました。

翌年、このブームを継続させようとポポロビル 1F で「戦国の杜」を開催、松が岬公園には募金と収益金で「上杉景勝公と直江兼続公　主従像」が建てられました。

「上杉景勝公と直江兼続公　主従像」

直江兼続公を NHK 大河ドラマに推進する会の活動

「天地人」の放送映実現までには、米沢市をはじめ関連地の懸命な推進活動がありました。米沢では平成 8 年に米沢直江会の総会で設立を決議、翌 9 年に「直江兼続公を NHK 大河ドラマに推進する会」が結成されました。六日町でも米沢からの声掛けに応じ平成 8 年に発足、翌 9 年に名称を米沢と統一しました。両会は NHK 山形放送局に海老原会長宛の要望書を提出、その後は作家の童門冬二、兼続夫人のお船を描いた「花に背いて」の著者・鈴木由紀子、火坂雅志などの兼続に関する講演会などを開催して地域住民の機運の醸成を図りました。さらに、ＮＨＫへの陳情を重ね、推進の輪は平成 11 年に与板町（現長岡市）、同 14 年には上越市、同 16 年には会津若松市に広がり、平成 19 年に 21 年の放送が決まりました。

2　兼続の肖像と上杉二十将之図

「集古十種」に描かれた直江親子の肖像

「集古十種」とは、江戸時代後期に刊行された古書画・古器物等の木版図録集です。松平定信の編集で、谷文晁などの絵師が模写を担当しました。兼続父子の像には「高野山龍光院瑜祇塔壁画」と記されています。この瑜祇塔は、兼続の妻お船が慰霊のため寛永 6 年（1629）に高野山に建てた宝塔です。その壁に、兼続父子の肖像が書かれていたのを模写したもので、兼続父子の容姿を忠実に描いたものと考えられています。残念ながら、瑜祇塔は文化 6 年（1809）に焼失しましたが、上杉神社で所蔵する「宝楼閣瑜祇塔図」で外観が伺えます。

なお、子・景明の肖像（右図）には装束に三重亀甲花菱の家紋が描かれています。この三重亀甲は直江兼続夫妻の墓の窓にも見られます。後年、この集古十種の肖像を元に様々な兼続肖像が描かれますが、装束の家紋を誤って三つ葉に描いたものもあって注意が必要です。

上杉謙信・景勝の家臣を描いた「上杉二十将之図」

市立米沢図書館で所蔵する甘粕家文書の中にある集合武将図です。右上に上杉謙信、左上に上杉景勝の肖像を描き、その下にそれぞれの家臣を描く珍しい構図になります。

兼続は景勝の右下に位置し、鎧や袖には亀甲花菱の家紋が描かれており、顔は「集古十種」の肖像とは違っています。左の上条義春は上杉一族なので、家臣団では№1 の位置になります。兼続の下には金色の指物を付けた甘粕景継（白石城主・三万石）が描かれています。甘粕家で作成して伝来したものでしょうか。

各武将の鎧の家紋や旗指物は、米沢藩で作成した「旗指物馬験等書上面付帳」等と一致し、そうした資料を基に描いたものと思われます。作成年や絵師に関する情報は確認できませんが、絵具や紙質から江戸後期の作品と推定されます。

3　新発見、非常に珍しい直江兼続の連歌

漢詩を詠んだ直江兼続と「売花」の短冊

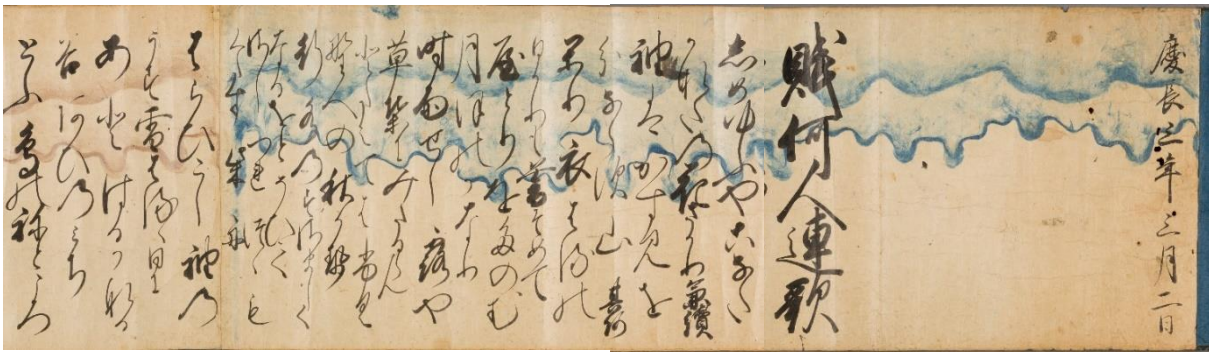
亀岡文殊堂（高畠町）には、兼続や前田慶次などの上杉家家臣 20 余人が、慶長 7 年（1602）に漢詩と和歌の百首を奉納した「亀岡百首」が残っています。その中で、兼続は漢詩 7 首、慶次は和歌 5 首を詠んでいます。また、兼続は京都に上洛すると漢和聯句（かんわれんく）の会に参加しますが、兼続は決まって漢詩文を詠んでいます。

当館では兼続の漢詩一首を所蔵しています。甘粕家文書に入る手鑑「鳥のあと」の中に貼られている「売花」と題する七言絶句の短冊です。

珍しい兼続の連歌　専門家から本物との高い評価を受ける

連歌とは、2 人以上の人が、短歌の上句（5・7・5 の長句）と下句（7・7 の短句）とを、交互に詠みつづける形式をいいます。兼続の漢詩は数多く確認されていますが、連歌として知られているのは唯一で、「雪ニ鷹ナクハルノトオ山」の句でした。慶長 3 年正月 10 日の「賦何人連歌（なにひとれんが）」の中で、景勝の「我国へ立チカヘルトシノ霞（かすみ）哉（かな）」を受けたものです。ただし、伊佐早謙（いさはやけん）編「景勝卿記（かげかつきょうき）」の中に、景勝・直江の 2 首だけ収録さたもので、原本も不明です。

そうした認識の中、当館に平成 14 年に寄贈された甘粕家文書の中に題簽（だいせん）に「時宗称念寺其阿」と記された巻物がありました。中を見ると、兼続と其阿（ごあ）の連歌懐紙（れんがかいし）でしたが、兼続が連歌？・本物？と疑問符が付く状況でした。その後、戦国期の文芸を研究中の大学院生・川﨑美穏氏（現・愛知教育大学助教）が来館し、この資料を紹介したところ、指導教官も含めて再調査を行い、兼続の連歌懐紙で問題ないと結論が出されました。そして論文『市立米沢図書館蔵会長三年三月二日賦何人連歌「しめゆふや」注釈　―新出の直江兼続・称念寺其阿両吟連歌―』を纏められ、新発見の兼続の連歌として詳しく紹介されました。



慶長3年3月2日　賦何人連歌「しめゆふや」　甘粕家文書 13　市立米沢図書館蔵

4　漢詩文を愛でた文人・直江兼続

兼続が漢詩文を愛でたことは、兼続が詠んだ漢詩と漢和聯句の他にも、「古文真宝（こぶんしんぽう）」や「文選（もんぜん）」といった中国の名文を集めた詩文集を、書写や出版したことでも知られています。

「文選」　米沢善本 100　　前期（6/28～7/24）展示

「文選」は、中国の南北朝の時代、梁の昭明大使が編纂した詩文集で、教養書として日本でも広く読まれました。この「文選」31 冊は、慶長 12 年（1607）に兼続が京都の要法寺（ようほうじ）に依頼して活字印刷したもので、「直江版文選」とも称されています。兼続の書籍に対する執着は目を見張るものがありますが、自己の関心にとどまらず、出版して広く文化に寄与しようとする兼続の心が伺えます。また、同じ時期に徳川家康が「貞観政要（じょうがんせいよう）」など政治に関わる書籍を多く刊行したのに較べると、兼続の漢詩文への関心の高さも示している書籍になります。

「古文真宝後集抄」　米沢善本 139　　後期（7/26～8/21）展示

中国の戦国から北宋までの優れた韻文・散文を集めた「古文真宝後集」の注釈本（ちゅうしゃくほん）になります。天正 16 年（1588）に兼続が景勝に従い上洛した折、妙心寺の南化玄興（なんかげんこう）より借用し書写したもので、南化は一月余りで写した兼続の熱心な姿に、「節義の高い人物」と称賛した序文を与えています。

南化など京都五山の僧との交流は、兼続の漢詩文の教養を高めると共に、その後には宋版の「史記」（国宝・現在は国立歴史民俗博物館蔵）などの貴重な書籍が兼続に託されていった点でも注目されます。

兼続が収集した貴重な蔵書は、元和 4 年（1618）に創建された禅林寺（ぜんりんじ）（現在の法泉寺）、米沢藩の学問所、藩校興譲館に引き継がれ、明治維新後は米沢中学、興譲館財団、更には明治 42 年に開館した米沢図書館に受け継がれ、現在に至っています。